



TITLE:

故田中宗愛博士を憶ふ

AUTHOR(S):

P. O

CITATION:

P. O. 故田中宗愛博士を憶ふ. 天界 1939, 19(217): 206-207

ISSUE DATE:

1939-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167809>

RIGHT:

私共の天文學への憧憬を高め、その門に入り易く案内された人は外には見當らない。私は同博士の御陰で皆既日食のコロナの偏光寫眞を世界最初に立派に撮り、又陰影縞の觀測もそれから附隨の實驗をもなすことが出来た。黃道光への近づき易い案内者でもあられた。私はその賜物として數箇の論文が出来た。學徒として論文が出来ること程楽しみは無い。来るべき皆既日食には、旅費の都合さへ出きるなら、コロナの偏光活動寫眞を撮らうと期待致してゐる。

山本博士によつて、天文學は始めて帝王、王侯の學でなくなり、大衆の學とまで水準を下げられた。これは日本の文化的發展に於て非常な功績である。

膨脹宇宙論も近年一度迷路に入つたが、最近再び論議されるやうになり、マックヴィットやフリントなどにより宇宙曲率の正負や、アインシュタイン項などが又々問題になつて來た。大宇宙を理論に掛けることは實に偉大なことで、人智の窮極と申しても宜からう。これ等に就いては、次の機會に筆を執り度ひと思ふ。(バリ造幣局で買つた ルヴェリエーのメダイオンを前にして)

故田中宗愛博士を憶ふ

理學博士田中宗愛先生は去る二月一日3時忽然として此世を去られた、誠に惜しい極みである。先生は明治24年生れで幼少の頃より自然科學に非常に興味を持たれ、鹿兒島の第7高等學校に在學中本會地方委員にして同校教授村上春太郎氏より個人的に天文學を教へられ、屢々村上氏宅の望遠鏡で深更迄2人で天體觀測せられた、其頃傍に居られたのが名古屋の金城女專教授村上忠敬氏の幼妾であつた。

大正6年東京帝大農科御卒業後日本染料會社に技師として就職、大正9年五月12日神戸出帆の三島丸にてヨロツパに向ひ、スイス・ドイツに於いて5年間有機・觸媒・酵素・染料化學を御專攻、此の間に日獨賠償委員として東奔西走せられ、ヨロツパ各地の天文臺・天文學者を歴訪され、フラマリオン氏を再三訪ねて行かれ、深く天文學をも究められた。大正14年九月御歸朝後滿鐵中央試驗所科長に就職せられて此間に理學博士號を授けられ、昭和9年神戸女學院専門部教授に招ぜられて教鞭を執られ、學内でも異色ある先生として亡くなられ



故 田 中 宗 愛 博 士 (1891-1939)

た事を非常に惜しまれた。

田中博士が御歸朝の際 スタインハイル製 10 輻運轉時計付赤道儀を持ち歸られ、是を南海沿線助松の自邸に据付けられ、御自身の御観測の他、毎夏遠州園に野營する少年團や女學院生徒にも觀望せしめられ天文講話を試みられた。先生は本會には古くより御入會せられ隠れて天文学の普及に盡力せられた。先生が父の遺志を繼がれて農科に進まれたが御自身は天文学を専攻したのであつたと御述懐せられた事もあつた。昨夏本會大阪支部が助松の先生宅で天體觀測講習會を開くや欣然として御指導して下さいました事も今は名残惜しい追憶である。先生の星を通しての人生觀、御德風は遺著に躍如たるものがある。(P.O生)